

図書館だより No. 11

平成 29 年 3 月 17 日

今日の修了式をもって3学期も終わりとなります。学年の節目を迎え、みなさんもしみじみと1年間の自分を振り返っているでしょうか。

「春休みだ！」と心を弾ませている人もたくさんいると思いますが、春休みはあっという間です。新学期には、よいスタートが切れるよう4月からの準備も怠らずに進めましょう。

とはいえ、せつかくの休みには、どこかへ出かけたいものですね。この時期は、苺狩りツアーの宣伝をよく目にしますが、みなさんは苺狩りに行ったことがありますか。埼玉県内にも苺狩りができる施設があちこちにあり（高校のすぐ近くにもありますね！）、遠くまで行かなくても気軽に苺狩りが楽しめるようになっています。この春休みは、友だちや家族を誘って苺狩りに出かけるのも楽しい過ごし方のひとつではないでしょうか。また、苺を使ったスイーツレシピに挑戦してみるのもいいですね。苺大福や苺のタルト、和菓子にも洋菓子にも合う苺はアレンジのし甲斐もありそうです。



*いちごづくし

596-7 『いちごのお菓子』 若山 曜子 || 著 マイナビ出版

食べると甘酸っぱさが口いっぱいになり、幸せな気持ちになれるいちご。そのまま食べてもおいしいですが、お菓子にしてもそのおいしさは抜群です。見た目も可愛い、春にぴったりないちごのお菓子づくりをしてみませんか。卵1つで作る小さめサイズのショートケーキやいちごと赤ワインのブラウニー、ムラなく生地を焼けるミルフィーユなど、作って自慢したくなるようなレシピがたくさん載っています。簡単に作れる焼き菓子や焼かないレシピなど、気軽に作れるレシピも充実しているので、「お菓子作りは初心者だけど、大丈夫かな」という人にもおすすめです。

*いちごつながりでこの本も

913.6-ミ 『いちご同盟』 三田 誠広 || 著 河出書房新社

「お前が北沢か」と、野球部のエース羽根木に突然声をかけられた僕。何の接点もない羽根木は僕に試合に出る自分の姿をビデオにおさめてくれと頼んできた。僕は戸惑いながらも「人の命がかかっている」という真剣な羽根木の言葉が心に刺さり、依頼を引き受ける。羽根木が僕に自分の姿を撮ってもらった理由、それはひとりの少女のためだった。羽根木の幼馴染であるその少女の名前は直美。病気を患い入院している直美を見舞う羽根木に付き添い、僕も直美に出会う。そこから三人の友情と恋、そして人生が動き始める。青春のもどかしさと、恋の切なさがつまった1冊。

春に読みたいのはこんな本

大学生の1日の読書時間が「0分」の大学生は約5割に上る——。全国大学生生活協同組合連合会（東京）が行った調査でこんな実態が明らかになった、というニュースを目にしました。たくさん読むことが「良い」ということではありませんが、読書時間が「0分」という人が多いのには寂しさを感じます。興味を持つ本は人それぞれ。気になる本から、自分のペースで読書を始めて、本のおもしろさを感じてください。

336-マ 『エッセンシャル思考』 グレグ・マキューン || 著 かんき出版

エッセンシャル思考とは、「より少なく、しかしより良く」を追求して生きていくための思考です。そして、結果だけでなく、プロセスも楽しめるようになる思考です。この本では思考を変えて、どう仕事をしていくかが書かれていますが、みなさんが自身の思考を整理したり、効率的な勉強法を身につけたりするのも役に立つ内容です。「なんでこんなことをしているんだろう」、「頑張っているのに成果が出ない」と悩みを抱えた時に開いてください。思考が散らかっている様子を図やクローゼットの中身に置き換えたり、ドラッカーやビル・ゲイツなどの名言（ハーマイオニーも登場します）を例えに使ったりしながらわかりやすくエッセンシャル思考というものを教えてくれています。

913.6-ム 『騎士団長殺し』 村上 春樹 || 著 新潮社

有名な画家である雨田具彦が住んでいた山の中の家で暮らすことになった私。今までの生業だった肖像画をやめ、そこでは制限なく好きな絵を描こうと思っていたのだったが…。天井裏で見つけた「騎士団長殺し」という題の絵を見つけたことを引き金に、私の世界は想像もできないような不思議な方向に動き始める。肖像画を依頼してきた隣人「免色」との出会い。雑木林の祠の裏にある穴から私を呼ぶ鈴の音。目の前に姿を顕した絵の中の騎士団長そっくりのアイデア。秋川まりえという少女。顔のない男。それらの意味するものは一体なんなのか。やがて降り注ぐ試練は私をどこへ運んでいくのだろうか。どっぷり春樹ワールドを楽しめるストーリーとなっています。

915.6-ミ 『神さまたちの遊ぶ庭』 宮下 奈都 || 著 双葉社

『羊と鋼の森』で本屋大賞 2016 を受賞した宮下奈都さん。その宮下さん一家が1年限定で山村留学した北海道のトムラウシ。一番近いスーパーまでは37キロ、携帯は圏外、テレビも難視聴地域と不便はあるけど、トムラウシでの暮らしはとても素敵だというのがどのページからも伝わってきます。小中学校は全校生徒を合せても10人。だから、何をしても先生や地元の人々が加わって、子どもも大人も本気で行事を楽しんでいる。大自然はいつだって圧倒的な美しさで心を満たしてくれる（大量の虫はちょっと怖いけど）。そんなトムラウシでのワイルドで、自由で、そして、あたたかい日々を思いきり楽しんでいる様子は読んでるだけでワクワクと楽しく、心を豊かにしてくれます。

🇯🇵 ニッポン再発見 🇯🇵

ニッポン再発見もいよいよ今回が最後となりました。この連載を通しながら日本の魅力を再発見できたみなさんが感じてくれていれば、嬉しいです。

ラストは南部九州（鹿児島・宮崎）と沖縄の3県です。明治維新から150年となる来年の大河ドラマが幕末のヒーロー西郷隆盛を主人公にした『西郷（せご）どん』に決定し、盛り上がりを見せる鹿児島。江田神社・青島神社・宮崎神宮など古事記の上巻に登場する場所のおよそ3分の2の舞台とも言われる神話のふるさと宮崎。日本屈指の観光県であり、「琉球王国の城（グスク）及び関連遺産群」（首里城など9ヶ所）が世界遺産にもなっている沖縄。どの県も豊かで美しい自然が見どころのスポットがたくさんあります。また屋久島、奄美大島、桜島、石垣島、宮古島など魅力的な島もたくさんあり、気になります。大自然を巡る旅や島めぐりの旅で心癒される時間を過ごしてみたいですね。



*沖縄の世界遺産を巡る

291-タ 『沖縄の世界遺産』 高良 倉吉 || 編著 JTBパブリッシング

15世紀なかばから19世紀に至る約450年間、沖縄本島の朱里を中心に存在した「琉球王国」そのグスク（城）及び関連遺産群が2000年にユネスコ世界遺産に登録されました。この本では、首里城をはじめ、今帰仁城跡（なきんじょうあと）、中城城跡（なかぐすくじょうあと）、座喜味城跡（ざきみじょうあと）、勝連城後（かつれんじょうあと）の5つのグスクと、識名園（しきなえん）、園比屋武御嶽（そのひやんうたきいしもん）、王陵（たまうどうん）、斎場御嶽（せーふあうたき）の4つの関連遺産群の全てについて載っています。首里城の名はみなさんもよく知っているかと思いますが、その他の遺産群についてもガイドブックだけでは得られない情報がわかりやすくまとまっており、琉球王国の歴史を追うと共にそれぞれの鑑賞ポイントを知るのに役立ちます。

*シェリーマン級の発見ができるかも！！

913.2-コ 『図解 日本人なら知っておきたい 古事記』 島崎晋 || 著 洋泉社

宮崎県の高千穂は、天孫降臨（てんそんこうりん）で神が降り立ったとされる特別な地です。高天原（たかまがはら）にいる天照大御神（あまてらすおおみかみ）は、孫の邇邇芸命（ににぎのみこと）をこの地に降ろし、葦原中国（あしはらのなかつくに＝日本）を治めるよう命じたのです。それまでこの地は因幡の白兔（いなばのしろうさぎ）の話にでてくる大国主神（おおくにぬしのかみ）が治めていたのですが、やはり天照大御神に使われた建御雷之男神（たけみかづちのおのかみ）の要請で、国を譲り出雲に隠退します。そうして邇邇芸命は三種の神器（八尺の勾玉と鏡、草那芸剣）を与えられ、筑紫の日向の高千穂の霊峰に壮大な宮殿を建てます。その後、曾孫（ひまご）にあたる神武天皇が東征し、大和を平定、初代天皇となったのです。古事記の物語はなんとなくバラバラになら知っているのではないのでしょうか。これを機にもう一度ちゃんと押さえてみませんか。

*皆が惚れた幕末のヒーロー

B913.6-イ 『西郷隆盛』 池波 正太郎 || 著 角川書店

時は幕末。京都にも江戸にも謀略と暴力が渦を巻いて展開していく中、心酔する島津斉彬の志半ばでの死やそれによって起こる一連の騒動、罪人としての島流しなど、多難をくぐり抜けて、幕府打倒に力をそそいだ西郷隆盛の半生が伝記小説という形で書かれています。

野心を持たず、いつでも自分のすべきことをまっすぐに命をかけてなしてきた西郷さん。その姿には、志士たちだけでなく、身分を超え、大人も子どもも心をひかれました。動乱の時代の中、なぜ誰もが彼を慕い、彼を求めたのかが読むほどにわかってきます。その魅力あふれる人柄に触れながら、幕末から明治維新にかけての歴史をより詳しく知ってみましょう。この時代の歴史を学ぶ視点から読んでも読みごたえ十分です。



図書館司書の「今月はこの本を読みました」



北村薫さんの『遠い唇』（913.6-キ 角川書店）を読みました。短編が7つ入っているのですが、その中の『解釈』がおもしろかったです。とある星の新星探査隊の基本情報調査官が地球に暮らす人間を知るために書店で本を選ぶ親子から奪ってきた3冊の本。夏目漱石の『吾輩は猫である』、太宰治の『走れメロス』、川上弘美の『蛇を踏む』 それぞれを彼らなりの解釈で読み進めていくのですが、ものすごくはちやめちゃなんです。『吾輩は猫である』は、猫は話をするのでできる生き物で、この本は夏目漱石という名の猫が書いた本という前提だし、『走れメロス』はメロスに太宰治が並走して様子を記録したものかと思いついて、『蛇を踏む』では、人間は蛇が変形して誕生するものかという結論が出てしまふし、宇宙人の発想は豊かだなあと所々吹き出しながら読みました。しかし、彼らにとっては真剣な「解釈」なんですよ。そこが、おもしろい。他の短編では、俳句に込められた素敵な想いを書いた『しりとり』が心あたたまる謎解きになっていて好きでした。

【今井】

「春の訪れはジャガイモから」NHK趣味の園芸野菜の時間、3月5日の放送タイトルです。家庭菜園をしていると、本当に実感できる言葉です。関東周辺では、春のお彼岸を目安にジャガイモを植え付けると上手く育てられると言われます。ですから、やっと気候が暖かくなってきたなと感じるこの頃になると、植え付けの準備に取り掛かります。冬の間になにもなくなって固くなった畑をスコップで掘り返し、堆肥を撒き、鋤きこみます。そうやってジャガイモを植える場所を確定させてから、他にどんな野菜をどう配置して植えるかプランニングしていきます。日の当たり具合や栽培期間、それに去年と同じ場所に同じ科の野菜を植えないようにして連作障害をさけてと、プランニングはとてもややこしいもの。栽培方法も念のため確認しておきたいし。そんな時、頼りにするのが『藤田智の菜園スタートBOOK 春夏編』（626-7 NHK出版）です。野菜の「適期」が一覧になっているので見やすいし、それぞれの栽培の仕方も詳しく丁寧。基本作業も土づくりから畝の立て方、支柱の立て方に苗の見極め方までいろいろと載っていて心強いです。カブに絹さや、なす、トマト。本を見ながら何をどう植えるか考える時が一番楽しい時間かも。

【鈴木】